

 書評

日本精神神経学会小児精神医療委員会 監修

齊藤万比古, 小平雅基 編

臨床医のための小児精神医療入門

大森哲郎

一般の精神科医にもある程度の子どもの精神医学の素養と経験は必要である。大人を診ていても症状発現が発達期にさかのぼることや前駆症状が児童期にあることはまれではないし、一般精神科外来で10歳代の子どもの診療する機会はよくある。にもかかわらず、子どもの精神科診療を学べる研修施設は必ずしも多くはない。学ぶ機会を求めている、あるいはもう少し専門性を高めたいと願っている研修医は各地にたくさんいるに違いない。

編者らはそのような研修医を集めて、国府台病院において2部構成計4日間にわたる充実した研修コースを開催していた。各項目原則30分のコンパクトな系統講義が基本単位であったという。ここで講師を務めた方々がそのまま本書の執筆者となっているとのことである。簡にして要を得た内容となったのは当然である。

本書の成立にはもう一つ別の経緯がある。編者らを含む日本精神神経学会の小児精神医療委員会が、子どもの心の診療に関する研修目標を、専門医取得をめざす若手精神科医に向けて明確に提示する作業を託されたのである。これを受けて編集されたのが本書なのである。何をどこまで学ぶべきかを明示した研修ガイドライン的な特徴を持つテキストとなったのも当然の成り行きである。

本書の構成は、総論は発達や母子関係など5項目にとどめ、各論に45項目を費やす。45項目は、「各病態」として自閉症スペクトラム障害など16項目、「特有の問題」として子ども虐待など4項目、「諸検査」として心理検査・認知機能検査など3項目、「ケース・フォーミュレーション」として1項目、「治療介入技法」として家族療法など15項目、「今後期待される介入技法」としてアウトリーチなど2項目、「病院以外での診療」として児童相談所など4項目に分かれている。

各項目の様式はすべて統一され、「要約」「理解へ

のチェックリスト」「自由ノート」「達成目標」の順であり、末尾には引用文献と推薦図書が挙げられている。解離性障害・転換性障害を例にとると、「理解へのチェックリスト」は、「『解離』という心的機制を簡単に説明できる」から始まり「背景に不適切な養育環境などが存在する場合には、必要に応じて関係機関と連携することができる」までの難易度順に16のチェック項目がある。「達成目標」は、10数行の記述を評者が要約すると、初級では、概念が理解できているが診断には上級医師との相談が必要な段階であり、上級となると、複雑化した症例の治療経験も積み、外傷体験に焦点化した治療も学んでいるが、外傷体験を取り扱わない治療的意義も理解し、必要な場合には児童相談所や福祉事務所とも連携をとることができる、というような具合である。編者の前書きによれば、「上級は児童精神科を専門分野として臨床活動に取り組んでいる医師の平均的理解度の水準を示している」から相当に高いレベルである。

若手医師は、本書をひもとくことによって、小児の精神医療に関して研修すべき課題を把握し、理解度の現状を点検し、研修の進み具合を知ることができることは間違いない。編集の意図は見事に実現されているのである。

それなりの年季を積んだ精神科医にもお薦めできる。評者は、「理解へのチェックリスト」と「達成目標」をチェックしていった、しばしば中級にも至らないわが到達地点のあまりの低さに青ざめた。あとかきの「全領域で“上級”の水準を満たしていると確信できる医師はほとんどいない」という編者の深慮の言葉にちょっとほっとした次第である。

(徳島大学大学院教授・精神医学)

●B5 240頁 2014年 定価: 本体3,600円+税 医学書院刊